

ブラックジャックなら中国ガンを分裂できる 194

中国は解体できる／国の要素をすべて備えている七大軍区／中華帝国の分割は中国人のため／烏坎村事件勝利の三つの要素／中国を分裂させ無害化するための五つの処方箋／情報統制に穴を開けた「アノニマス」／言論統制ができなくなる共産党政権／中国を無害化するために／一瞬にして終わる中華帝国

日台連合で中国ガンを退治できる 210

「核心的利益」発言は「色厲而内荏」の現れ／台湾の法理的独立は中国分裂の起爆剤／現実味のある中国民主化運動支援／民主化運動を支援してきた国民党／中国人が傾倒する台湾の民主と自由／台湾は中国の核心的利益ではなく核爆弾／「日本版台湾関係法」を制定し台湾と政府間関係を持つ／アメリカの「台湾関係法」とは／台湾で高く評価された浅野和生教授の「日台関係基本法」私案／中国反体制派も期待する日台連合／中国の民主化を支援

あとがき 225

1 中国という名のガン細胞

なぜ中国はガンなのか？

アポトーシスという自己犠牲の自然現象

細胞にはアポトーシス (apoptosis) という現象が起こる。これは「細胞の自殺」のことで、たとえばオタマジャクシがカエルに変わるとき、尻尾がなくなって足が出てくるが、これも細胞の自殺だ。尻尾の役割が終わったので、自己犠牲の精神で自ら消滅していく。

人間も一個の細胞から始まり、これが分化して、肺や胃の細胞となっていく。人間は最初、男性と女性の生殖器の原型を両方持っているが、女性の場合、男性生殖器部分の細胞は自ら死んでいく。

それは、男性生殖器部分の細胞が女性の細胞に「どうぞ」と譲って死んでいくようなものだ。肺が作られるときも、他の細胞が肺の細胞に場所を譲っていく。これが細胞の自死であるアポトーシスという現象だ。

このように、人間は一個の細胞からさまざまな細胞が作られる。ノーベル医学・生理学賞を受賞した山中伸弥・京大教授が開発したiPS細胞（人工多発性幹細胞）は、皮膚などの体細胞を「初期化」し、肺にも生殖器にもなり得る能力を持った細胞だ。受賞によりかなり宣伝されたので、一個の細胞からさまざまな細胞が作られることを多くの人が知ることになった。成長した体でも組織ごとに細胞の入れ替えが断断なく続く。たとえば皮膚は二八日周期で代謝する。赤血球の寿命は約一二〇日で、胃の粘膜は三日程度で変わる。角膜などは毎週変わる。

つまり、より良い個体を作るため、また新しい生命を生むため、古いものは自ら死んでいくのだ。子供が大人になったら、親が死んでいくように、人類を含め生命とはそういう循環の中に生きていく。自分の機能が駄目になったら、新しい生命に道を譲る。資源を明け渡すわけである。

利己的で自己中心的なガン細胞

もしこのような生物的原理が狂えば、自然はすべてが狂ってしまうことだろう。しかし、その原理に従わないものがある。それがガン細胞だ。

ガン細胞が普通の細胞と大きく異なる点は、まず非常に利己的で自己中心的存在であるということだ。ガン細胞は無限増殖する。悪性が高ければ高いほど、均一性に欠けるモザイク現象を起こす。なぜなら、この細胞は「俺が、俺が」ということで他の細胞を食べる「共食い」現象を起こし、強い者が弱いものを食い尽くして崩壊させていくからだ。

ところが、ガン細胞は独自では生きていけず、必ず他の細胞に寄生して、その栄養素を奪い取って大きくなっていく。やがてガン細胞に蝕まれた生体は最終的には死ぬことになり、生体を食い尽くしたガン細胞も、それによって死滅する。

なぜ中国はガン細胞なのか？

今の中国を見てみるとガン細胞とそっくりだ。どの特徴も中国そのものだ。

生物原理の中ではアポトーシスという「譲り合いの精神」が働いて、新しい生命が育まれる。しかし、ガン細胞はこの精神をまったく持ち合わせていない。ガン細胞は自己中心的存在だ。胃のガン細胞なら、「俺は胃だ。文句あるか」と強引に肝臓に押し入っていく。これが胃ガンの肝臓転移だ。

この自己中心なところ、「俺さえ良ければそれでいい」「俺のものは俺のもの、お前のも俺のもの」という性格は中国そのものだ。

中国人は「大陸の気風がある」「悠然としている」などといった印象を抱いている日本人は少な

くないようだが、中国民族の自己中心的な性格は際立っている。日常生活でも、「他人のものは俺のもの」といわんばかりで、油断も隙もないのは、中国人と深く接触している人なら知っているはずだ。

その象徴が台湾に対する態度である。戦後、台湾人は内戦で敗れて渡ってきた中国人一五〇万人を寛大に受け入れた。だが、彼ら中国人は「この島は俺たちのものだ」と言って、六〇〇万人の台湾人の上に君臨し、日本人が残した官民の資産を奪い、台湾人のポストを奪い、台湾人の財産を盗み、女性をさらうようなことまでした。そして現在、ふたたび中国は、台湾を「中国の一部だ」と言いながら、武力で奪い取ろうとしているのだから、まさに強盗国家、強盗民族である。

自己中心的だから、その社会は秩序のないモザイクだ。そして、そのモザイクが世界に広がりを見せようとしているから始末に悪い。

どんなに乱暴な人間でも、どんなに極限状態であっても、生命を後世に残そうとするものだ。ところが中国の場合、歴史上、何百回と深刻な飢饉に見舞われ、そのたびに中国人がとった行動は「共食い」だ。その中でよく見られたのが「易子而食」（子を交換して食す）という現象だ。自分の子供はさすがに食べることができず、そこで自分の子供を他人に食わせ、それと交換に自分は他人の子供を食べるというものである。

この「共食い」という中国独特の歴史を見れば、中国人には自己犠牲の精神が働いていないことがよくわかるだろう。

増殖し続ける中国ガン細胞

またガン細胞の無限増殖は、中国人の人口増加を思い起こさせる。中国の現在の人口は一三億五〇〇〇万人と言われるが、統計数値だけではわからない。統計からもれている戸籍のない世帯「黒戸（ヘイフー）」を含めれば、さらに一億人や二億人は上乘せされる。一人っ子政策をとっているも、増殖はとどまることを知らず、これで一人っ子政策がなければ、無限増殖を続けるだろう。

今の中国は対外的な資源の争奪戦を展開しているが、アメリカのエネルギー情報局 (Energy Information Administration) の統計によると二〇一〇年度の中国のエネルギー消費は世界の四六％も占めている。しかも、毎年八％以上の経済成長を維持していくというのだから恐ろしい。

この一事を見ただけでも、中国による「和諧世界」（調和のとれた世界）の呼びかけなど、単に各国の警戒心を弱めるための詐術にすぎないことがわかる。中国のおかげで、地球はすでに「忍耐」の限度を超えているのだ。

中国ガンのモザイク現象

中国国内の状況はガン細胞のモザイク現象そのものだ。貧富の格差、犯罪増加、環境汚染といっ

た共食い現象がそれである。朱鎔基元首相は在任中、「中国では1%の人間が50%の富を独占している」と指摘したが、その数年後の統計によって「0・5%の人間が80%の富を独占している」ことが明らかになった。このように貧富の格差は急速に拡大しているのだ。

これは中国の公式統計の数値だから控えめなものだが、この国の二億四千万の人間は二ドル以下で一日を生活しているという。その内の一億数千万人は一ドル以下で暮らしている。つまり、中国のGDPは上がっているわけだから、貧富の格差はとてつもなく大きく広がり、これはまさに均一性を欠いたモザイク現象そのものだ。

それに加えて「転移」もある。毎年、数百万人規模の中国人が世界に散らばり、各地で秩序を崩壊させている。中国はまさにガン細胞そのものなのだ。

だが、問題は日本人はじめ世界の人々にこの認識があるかどうかである。

中国は地球に巣食うガン細胞

たとえば「チャイナ・ウオッチャー」という医者が一〇人いるとすれば、九人はこの中国という名のガン細胞を見ても「大丈夫だ」と診断する。つまり「これは育ち盛りの少年だから、どんな栄養（資本と技術）を与えればいい」「今は暴れん坊だけど、まだ心と体のバランスがとれていないだけ。いずれ知的成長をとまらなくて、いい大人になるだろう」などと言っている。

ところが最近、「これはガンではないか。この行動は異常だ。いくら待っても正常にならない」と考える医者も出てきた。

これを問題視する医者は増えてきたが、まだ病院で診察している段階で、様子を見ようという態度をとっている。すでにガンが発生しているのに、これをどうやって治療するか、その方法を見つけた医者はまだ一人もいない。

中国は「いづれ責任ある大国」になるだろうという甘い期待が日本にはある。しかし、それはまだ中国がガン細胞であることを知らないからだ。また、中国ガンが人類全体に危機を及ぼし始めていることも認識していないからに違いない。

ガン細胞を放置するとどうなるかは医者でなくともわかる。ガンを放置してよいとは誰も考えていない。

医学の世界では正しい診断が何より大切で、それによって初めて治療ができ、人命が救われる。中国問題も同様である。中国は地球に巣食うガン細胞であることをまず直視することで初めて、中国問題の治療法を確立できるのだ。

中国ガンに奪われた大気

北京の空はいつも灰色

人間は生きていくため、空気を必要とする。しかし、中国ガンにはそんなことはどうでもいい。空気が汚染されようがお構いなしだ。

ガン細胞は成長と増殖のスピードが非常に速い。それゆえ排泄物や老廃物もたくさん出す。そしてまわりの正常な細胞、さらに自分自身の生存環境をも汚し、共食いもする。ガン細胞は極めて貪欲な存在で、自分のためならなりふり構わずまわりのものを破壊していく。すべてを食い尽くして肥大し続けるのがガン細胞である。ついには、自分もその貪欲さによって死に至る。これがガン細胞の宿命である。

中国の環境問題で見られるのは、まさにこのような現象ではないのか。なぜなら、中国の環境汚染問題の根源は二つあり、一つは中国人の徹底した拝金主義である。もう一つは冷酷なほどの利己主義である。

だから、この国が肥大化すればするほど、経済発展が進めば進むほど、さらに貪欲になり、自分のまわりの環境さえも破壊し尽くしてしまう。

まず大気汚染について見てみよう。

どんな国でも首都は「国の顔」として、環境保全の面でも心血を注ぐが、中国の首都北京の場合には事情が異なる。

日本のテレビニュースでもよく北京の風景が映し出される。屋外であれば、どんな時でも霧がかかっているような映像だ。それは天気の良いではない。霞んで見えるのは大気汚染によるものだ。

邪悪な内面でありながら、外面を立派に飾ろうとするのが中国。そんな中国だから、北京オリンピック開催に際しては、大気汚染改善の対策をとった。

二〇〇八年一月一日の産経新聞のトップ記事「基準外の北京晴天」によると、北京オリンピック開催におけるマラソン選手にとって最大の敵は、他の強豪やコースではなく、汚れた空気だという。この記事を書いた記者はそのコースを走ってみたそうだが、そのときの感想は「空気がほこりっぽい」というものだった。

それでもこれは中国が懸命に改善に努めた結果なのだ。なぜなら、国家の面子をかけたオリンピック開催に備え、北京市内の一六七もの工場を郊外へ移転させ、さらに一五〇万人もの住民を立ち退かせているのだ。しかし、面子のためにとった大気汚染対策でしかなかったから、オリンピックが終われば元の木阿弥、効果は消えてしまう。

二〇一一年の全米経済研究所(NBER)の研究報告では「中国政府は北京オリンピック期間中

に北京市の空気の質を三〇%向上させることに成功したが、オリンピック閉幕から一年後には約六〇%の改善成果を失った」と伝えている。

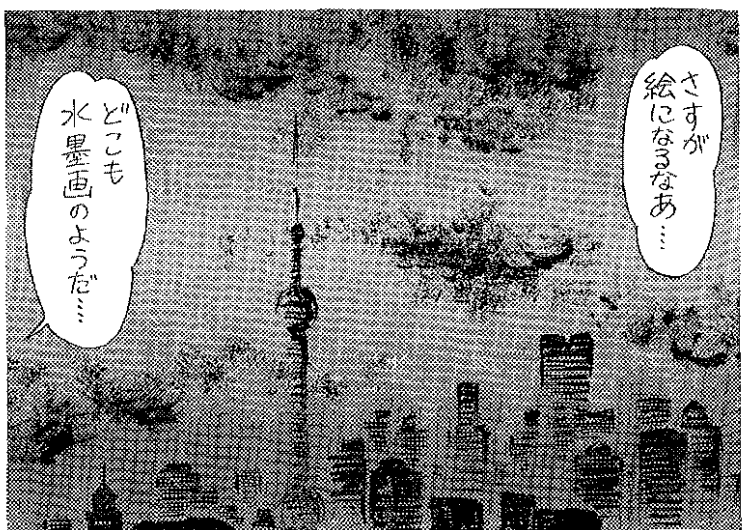
中国の大気汚染は世界の脅威

国家の威信をかけて大気汚染の改善を図っても、このありさまだ。北京以外の主要都市でも、雲の少ない冬の晴天時でさえ、スモッグに覆われているため、上空からは都市の輪郭がはっきり見えない。

OECD（経済協力開発機構）のデータによれば、中国の主要都市の六〇%が世界で最悪レベルの大気汚染に見舞われている。調査は三四二都市で行なわれたが、そのうち二一七都市で汚染が年々悪化している。

それは工業汚染のためだけではない。華北のすぐ北にゴビ砂漠があり、そこから冬になると大量の黄砂が飛んでくる。北京ではこの黄砂が、ひどい時には一〇センチから二〇センチも積もる。また、この黄砂は汚染した空気中のさまざまな化学物質と結合し、偏西風に乗って日本へも運ばれてくるのだ。

このように大気汚染の最大の被害者はもちろん中国人だが、風下に位置する日本人も被害者なのである。



工場や自動車の排気だけではない。発電量の八〇%を占める火力発電所の影響も見逃せない。石炭が豊富な中国では発電は主に石炭に依存しているが、この国の石炭は硫黄分を多く含む低質のものだ。しかも、増加の一途をたどる電力不足を補うため、一〇日に一基の割合で火力発電所を造っているというのだから、大気汚染が改善されるはずもない。数年前のことだが、貴州省の貴陽発電所の周囲に真っ黒な煤すすが降り積もるといふ事故が起きた。品質の悪い石炭が原因だった。

このように、石炭火力発電所をどんどん建設することが増加する電力需要をまかなう手っ取り早い方法だったが、その結果、二酸化炭素の排出量も急速に増え続け、二〇〇七年には中国は世界最大の排出国になっている。

さらに問題なのはセメントだ。火力発電所建設のためセメントの生産も急ピッチで進められているが、セメント生産は大量の粉塵と有害物質を発生させ、大気汚染の元凶と言われている。ちなみに、中国のセメントは世界の総生産の五四%（二〇一〇年）を占めている。

自分に都合の悪いデータを出さないのが中国だ。しかも、二酸化炭素排出量を削減するよりも経済発展を維持する政策をとり続けている。しかし、大気汚染は地球規模の問題だけに世界の関心事になっている。WHO（世界保健機関）によると、大気汚染による死者数は年間三〇〇万人で、中国の大気汚染による二〇〇七年の死者数は六五万六〇〇〇人と推計している。これはアメリカの七万人をはるかに上回っている。

中国はすでにアメリカを追い抜き、世界最大の二酸化炭素排出国に躍り出て、地球の環境にとっては大きな脅威となっている。

世界の空気を犠牲にしても経済を發展させようとする中国

一九九〇年代から年率二桁台の高度経済成長を続ける中国では、大気汚染対策は後回しで、そのため周辺諸国は中国からの越境大気汚染の脅威にさらされている。

中国のエネルギー消費量は、二〇一〇年にアメリカを抜いて世界一位となった。環境汚染物質の排出量も世界トップクラスである。先に述べたように、地球温暖化の原因である二酸化炭素の排出量も世界一で、全世界の排出量の実に四分の一を占めている。また硫黄酸化物の排出量では、ロシア、モンゴル、韓国、北朝鮮、日本のすべてを合わせた量の一〇倍を超えている。

これらの理由は、中国が第一次エネルギーの七五%を石炭に頼っていることにある。その燃焼による二酸化炭素と窒素酸化物（NOx）は国際基準をはるかに超え、それが酸性雨の直接の原因になっている。そして、その酸性雨が偏西風によって運ばれ、日本にも届き始めているのだ。

窒素酸化物は呼吸器系疾患を引き起こす原因物質の一つだが、中国の窒素酸化物の排出量は、この四半世紀で四倍近くに急増し、二〇二〇年までにはさらに倍増しそうな勢いだ。

日本の海洋研究開発機構や九州大などのチームは二〇〇八年四月、火力発電や自動車の排出ガスなどによる窒素酸化物の排出量を分析し、日本の排出量は二〇〇〇年以降、横ばいと予想されているが、「中国で環境対策がとられないまま経済發展が続けば、日本で光化学スモッグの原因となる大気中のオゾンが増加し続け、環境基準の超過が大幅に増える」とする計算結果を発表した。

また、中国が環境対策をとらなければ、日本でオゾン濃度が環境基準の六〇ppbを超える時間数は、二〇〇〇年の年間二〇%から二〇二〇年には三〇%に増加することになるという。

アジア二四カ国の窒素酸化物は一九八〇年から二〇〇三年までの二三年間で二・八倍に増加しているというが、この間、日本は工場での汚染物質除去設備の導入やハイブリッドカーの導入などで約三割を削減している。ところが中国は逆に三・八倍に拡大させ、二〇〇〇年には二四カ国の総排

出量二五二万トンのうち、約四五%を占めるに至った。

その後も中国の窒素化合物の排出量は、石炭火力発電などを中心に拡大の一途をたどり、三年間で一・三倍にもなっている。

二〇一〇年九月二六日に発表されたアメリカの航空宇宙局（NASA）の報告もまた深刻だ。粒径二・五ミクロン（一ミクロンは千分の一ミリ）以下の大気汚染物質である微小粒子状物質「PM_{2.5}」の大気中濃度が世界で最も高い地域は中国だと発表した。

微小粒子状物質は肺の奥深くまで入りやすく、血液に進入して気管支や心血管疾病の慢性病を引き起こす原因となる。特に粒径二・五ミクロン以下の微小粒子は、呼吸時に気管を通り抜けて気管支や肺まで達し、肺胞に入り込んで血液に進入、含有する重金属などの物質が血中に溶けだすため、人体への影響が大きい。

中国の大気中濃度が高いということは、それだけ汚染が深刻であることを意味する。世界保健機関（WHO）は微小粒子状物質の年平均値が一〇マイクログラム／立方メートル以下であれば安全との指針を定めているが、中国の年平均値は五〇〜八〇マイクログラム／立方メートルもあり、すでにWHOの安全値の五倍から八倍に達している。

空気汚染観測は「内政干渉だ」と非難する中国

中国もいちおう空気の汚染度を観測しているが、中国は空気中の粒径一〇ミクロンの「PM₁₀」汚染粒子だけ発表している。北京のアメリカ大使館は北京在住の大使館員やアメリカ人のため、二〇〇八年から大使館内で空気中の微小粒子状物質「PM_{2.5}」を観測し、そのデータを一時間ごと中国版ツイッターで発表している。

このデータは公開情報だから中国人もその恩恵にあずかっているはずだが、二〇〇九年に中国の環境保護局は「中国人民を混乱させている」と強く抗議した。中国とはそういう国で、真実を知らせると国民が混乱し、政府が統制できなくなる国なのだ。

アメリカがその抗議を無視して観測を続けて発表していると、二〇一二年六月五日の「世界環境デー」に、中国環境部の呉曉星副部長は「中国の空気品質の観測は中国政府の管轄であり、他国大使館の観測はウイーン条約に違反する行為で内政干渉だ」と厳しくアメリカを非難した。

都合の悪いことはみな「内政干渉だ」と非難するのが中国だが、実はアメリカ大使館が発表する観測データを細くチェックしているのが中南海に住む中国の高官たちだ。自国民はどうでもよく、大切なのは自分たちだけ。中南海の高官の部屋に大型の高性能空気清浄機が取り付けられていることは、すでに中国のマスメディアも報道している。北京の空気がどこまで中国ガンに汚されているのかは、そのガン細胞自身もわかっているようだ。

アメリカ大使館に刺激されたのか、中国も二〇一二年から北京、天津、上海、重慶の四直轄市と珠江デルタと長江デルタの二カ所で微小粒子状物質「PM_{2.5}」を観測することになったという。

ガン細胞に汚染された水

「無錫旅情」の街に突然起こった悪臭事件

人間にとって、空気とともに大切なのが水である。日本は瑞穂の国で、世界の中でも水にたいへん恵まれている。日本にも偶発的な水質汚染はあるが、日本の水が全面的に汚染されるということはずから考えられない。その最大の理由は、日本人は古来から、水を汚してはいけないということ常識としていたからだ。

しかし、自己中心的なガン細胞はそのような常識を持ち合わせていない。ガン細胞は膨張し続ける本能だけが働いているから、栄養分を貪り、排泄物をとる構わずまき散らす。しまいに自分の生存に不可欠な水さえも汚してしまうのだ。中国の経済発展と水質汚染はまさにその構図であろう。

中国の水がどれほど汚染されているのかを理解する一つの事例がある。それは、二〇〇七年五月に起こった太湖のアオコ大量発生による無錫市の水道水悪臭事件である。

日本でも「無錫旅情」の歌で知られる無錫市は太湖の北岸に位置し、日本人にはロマンチックな水の都というイメージがあるようだが、二〇〇七年五月末、ここで二百万人の市民が使う水道水が突然異臭を放ち始めた。もちろん飲むことはできず、洗濯で使っても、衣類についた臭いは何日も残るほどで、体も洗えない。

その原因は、水源である太湖にアオコが大量発生したことにあつた。太湖の湖面は濃い緑色のペンキが漂っているような状態になっていた。

これは中央政府にとっても無関心ではいられないことだった。なぜなら一九九二年、李鵬首相が国を挙げて汚染対策に取り組み、そのモデル事業としたのがこの太湖だったからだ。そこで当局は、雨が少なく水量が減り、そのためアオコが大量発生したと説明し、無錫市は四日間湖水平水（水道水）を「きれいにした」と発表し、市長や官僚は記者たちの前で、それを飲んで見せたという。

たった四日で「きれいにした」というのが事実なら、これは神業という他はない。たとえば台湾・高雄の愛河などは、工業排水によってドロドロに汚染され臭いを発していたが、その臭いを取り除くまで三〇年以上もかかっているのだ。中国で三番目に大きい湖である太湖となれば、四日でもきれいになるわけがない。

たしかに水道の蛇口から出てくる水は透明にはなったが、それで臭いが消えたわけではなかった。そのため、市民はミネラルウォーターを飲むようになった。市内の美容室では、洗髪にミネラルウォーターを使わないと客が入らなくなった。さらに、金に抜け目のない中国商人はこの「チャンス」

を利用し、ミネラルウォーターの値段を六倍にもつり上げたというのである。

中国人が政府の言うことを信用しないのには、それなりの理由がある。

たとえば、中国の水の検査基準には透明度や大腸菌などの生物的基準などはあっても、役人の都合で、水が澄んでいけば合格にすることも可能だ。

役人の決めた「検査基準」とは役人のゆすりの道具であって、自分に都合の悪い時には適用させないのだ。

汚染の真因は農工業の汚染水

太湖でのアオコの大量発生は直接の原因はたしかに雨不足だったが、本当の理由は農業汚染水と工業汚染水の垂れ流しによるものであった。

太湖は約三千万人と言われる周辺住民の水源になっているが、この地域は中国一の大穀倉地帯で、非常に無理のある食糧増産計画により、化学肥料や農薬を最も使用する地域になっている。そこで汚染された水が太湖に流れ込んでいたのだ。

工業排水も深刻だ。上海や蘇州に近い太湖の周辺は中国で工業が最も発展しつつある地域で、税収も多い。工場のほとんどが重化学工業で、そうした工場からの排水が流れ込むのが太湖なのだ。

長江から流れ込む汚染された水は年間二億トンにのぼる。そのため、太湖周辺地域での住民のガンの発生率は全国で一位だ。ある村での肝臓ガンの発生率は、全国平均の百倍に達しているという。これは有害な化学物質を摂取すれば、最終的に肝臓に蓄積されるためである。

汚染を告発して逮捕された呉立紅氏

このような太湖の汚染状況を告発した人物に呉立紅氏がいる。彼は二十数年をかけ、太湖の汚染原因を突き止め、汚染水を垂れ流していた数百件の企業リストを公表したと伝えられた。

報道によれば太湖湖畔の江蘇省宜興市に住む呉立紅氏は、太湖周辺にある数千の化学製品工場の廃棄物を徹底的に調べ、工場から流れ出た排水・汚物の写真を撮り、湖水のサンプルを調査員に送り、現地のマスコミにもこれらの情報を伝えた。現地の工場長や地方の権力者からの脅しも恐れず通報を続けた呉氏は、嫌がらせに遭ったため職を失い、家庭生活にも支障が出たという。

呉氏は当初、宜興市の汚染に対してのみ証拠収集を続けていた。ところが、当局がなんとその宜興市を「全国環境保護模範都市」と認定して表彰したのだ。呉氏がこの理不尽な表彰を取り下げようとしてアピールした途端、逮捕されてしまった。

宜興市の警察は呉氏に罪を認めさせるため拷問し続け、結局、呉氏は詐欺罪と脅迫罪で三年の実刑判決を言い渡された。

皮肉なことに、呉氏が逮捕されて間もなく無錫の水道水悪臭事件が発生した。彼が警告してきた

通り、太湖に流れ込んだ有毒な排水と汚物は大量のアオコを発生させた。地方政府は湖水の飲用不可の緊急宣言を余儀なくされ、二百万人以上の飲用水源が失われた。

太湖の汚染状況はさらに悪化

さすがに中国当局もこの事態を重視せざるを得なくなり、周辺の一三〇〇以上の工場に警告、あるいは操業停止の命令を下した。しかし、二〇〇七年に閉鎖を強いられた多くの化学製品工場は、その後、別の名称で営業を再開している。これは中国人が得意とする「その場しのぎの偽装工作」と言ってもよい。

太湖では現在も新たな汚染が進行している。化学製品工場の責任者たちは一様に汚水処理設備を設置していると主張するが、水質専門家は「これらの設備は検査の時だけ起動させ、検査員が帰れば停止させている」と指摘している。これもまたその場しのぎの偽装工作だ。これでは水質改善が進まないのも当たり前だろう。

北京公衆環境研究センターの馬軍氏は、太湖の汚染状況はさらに悪化していくだろうという予測を発表している。

現在、太湖周辺の各都市では新たな水資源を探し始めているという。これはすでに太湖の水質が改善する見込みのないことを示している。汚し尽くし破壊尽くしたのち、別の獲物を狙っていくこ

の中国人の本能は、いかにもガン細胞らしい行動だ。

人類の生存を脅かす中国の水汚染

もちろん、太湖の水汚染は一例にすぎない。中国の水質汚染は構造的なもので、全面的かつ広範囲に及んでいる。中国の都市の九〇%の地下水、河川や湖沼の水の七五%が汚染されている。そのため、毎日七億人が汚染された飲料水を飲んでいることになる。

中国国家環境保護局政策法規司(局)の別濤副司長は二〇一二年五月、中国紙「第一財經日報」の取材に対し「中国の川はすでに七色に染められている」と水質汚染の深刻さを認め、「南方の川はすべて汚染されている。北方の川はすべて枯渇している」という現状を伝えた。

同氏は深刻化する水汚染について、国が設けた排

七色の川

ああそれは...
名前のことい
なかく?

白河 黒龍江
紅河 黄河 青江
鴨綠江 金沙江



水基準があるが、無許可の排水や基準値を超えた汚染水の排出が日常的に起きていると、企業のモラルの低さを指摘した。

法があつても守られることのない、中国の一面がこの言葉からもうかがえる。中国では、法は政府が人民から搾取するための道具であり、役人がワイロを受け取る手段に過ぎないのだ。

もちろん汚染された水は最終的には海へと流れ、日本にも影響を及ぼす。今の中国の環境汚染を放置すれば、やがて地球そのものがもたなくなるだろう。つまり、中国の存在が人類の生存を脅かしているのだが、ガン細胞にとってはどうでもいいことなのだ。

世界最大の排水溝と化した長江

中国では毎年六〇〇億トンもの汚水が出ており、その量も年々増えている。そのうち八〇%は未処理のまま、河川に直接垂れ流されている。そのため水質は悪化する一方だ。

全長六三〇〇キロに及ぶ中国最長の河川である長江（揚子江）への汚水排出量も年々増加している。二〇〇五年には二九六億四〇〇万トンだったが、翌年には三〇五億五〇〇万トンと初めて三〇〇億トンを超えた。この汚水量は黄河の水量に匹敵する。その後も汚水排出量は増え続け、二〇一〇年には三三九億トンまで増加した。そのうちの二二七億五〇〇トンは工業排水で全体の六七%を占め、糞尿などの生活污水は一・二億トンで三三%を占めている。

長江流域水資源保護局の統計によると、七〇年代末の長江への汚水排出量は一〇〇億トンに満たない九五億トン、八〇年代末は約一五〇億トン、九〇年代末は約二〇〇億トンだったというから、二〇〇〇年以降の増加量がいかに異常かわかるとういものである。

数々の歴史の舞台になり、その雄姿と美しさが数多くの文人に謳われる母なる大河である長江は、今や農業を含む農業排水、都市生活污水、さらに糞尿にまみれた世界最大の排水溝と化したのだ。

これらの問題に対し、長江流域水資源保護局の臧小平副局長は、「汚水は増えているが、国内の主要な河のうち、長江の水域は『優等生』に属しているので、心配に及ばない」と発言した（二〇一一年一月九日「中国経済参考報」）。中国高官のこのコメントが優等生的ガン細胞なのである。

渤海湾を死滅させた「毒水」垂れ流し

河川の水質悪化で、沿海では珊瑚礁が汚染され、赤潮が大量発生している。長江流域の森林の喪失がもたらす大量の表土流出によって、東シナ海は広大な海底砂漠となり、漁場が喪失した。その結果、中国の漁民は遠洋まで出かけ、魚介類の争奪を行なっている。

黄河の出口である渤海も、河川の汚染と海底の砂漠化によって死の海に瀕している。渤海には五三の河川から水が流れ込んでいるが、そのうち四三の河川の汚染が極めて深刻で、遼寧省、河北省、山東省の一〇五カ所の汚染地域からこれらの河川に直接汚水が垂れ流されている。毎年、数十億ト

ンの汚水と約一〇〇万トンの汚染物質が流れ込み、その流れ込んだ汚染物質が付着したゴミは、日本の北九州の沿海地域に大量に漂着している。

これについて天津市塘沽区の水産局漁政課は「渤海湾海域は、今や魚一匹見られない死の海と化してしまった」と説明している。遼東半島と山東半島に囲まれる渤海湾は、かつては魚介類の宝庫、海洋公園といわれていたが、汚染されてへドロ湾と化した今日では、魚が生息できない「死の海」だというのである。

日本も中国水汚染の被害者

海の水質の汚染の度合いは、エチゼンクラゲの大量発生を見ればわかる。かさの直径は二メートル、重さも五〇キロあるこのお化けクラゲがなぜ汚染の指標になるかというと、そのもともとの生息地が渤海湾だからだ。このクラゲはプランクトンの少し濁った水質を好むのだが、それが渤海湾から脱出するというのだから、そこがどんなに汚れているかがわかるうというものだ。

エチゼンクラゲは渤海湾を出て黄海に逃げ込み、さらに対馬海流に乗って日本海に入り込んでいく。これはつまり、日本海にも汚染が流れ込んでいくことを意味している。

日本は中国からの偏西風の風下であるばかりでなく、さらには海流の下流でもあり、汚染された海水が黒潮に乗って日本に押し寄せているわけだ。黒潮は中国沿岸を北上し、長江、太湖の汚水の出口である上海付近で二つに分かれ、その一つは黄海を一周してふたたび黒潮に合流する。そして黒潮は対馬を通って日本海に流れ込むのだが、その先の出口といえば幅の狭い津軽海峡と宗谷海峡だから、結局は中国から来た汚染物質は日本海で蓄積されることになる。

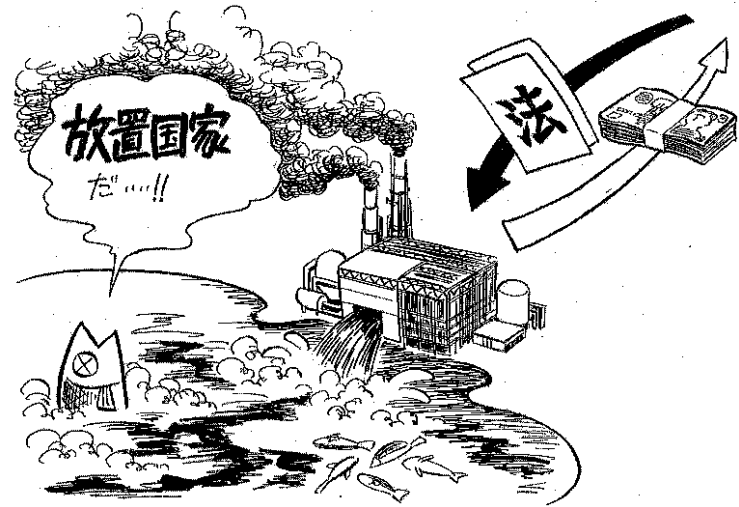
中国の水の汚染による最終的な被害者も、やはり日本になるのである。

環境保護の法整備というアリバイ工作

では、中国は環境に関して何の法律も整備していないのかといえば、そうではない。中国には「水汚染防止法」「大気汚染防止法」「海洋環境保護法」などがある。それなら中国は法治国家かといえ、そうではない。これらの法律の目的は、一つは国際社会に対する見せかけ、つまり「アリバイ工作」であり、もう一つは企業を「ゆする」ためである。

中国では、すべての企業は基本的に地方政府とグルになっている。なぜなら、そうして地方政府に利益をもたらしていかねば、企業は生きていけないからだ。そのような地方政府は企業が環境を汚染した場合、こうした法律を盾にして何をするかといえば、まず「違法だ」とは言わず、「違反だ」として「罰金」を徴収する。この「罰金」というのがワイロなのである。

これが法治国家ではない人治国家の姿である。このような国の法律とは、権力者が人民を威圧するための道具で、「もし我々の意に沿わないことをすれば、法律を適用するぞ」と脅して、ゆする



わけである。法を執行するかしないかは統治者の胸先三寸で決まるから、そこでワイロが発生するのだ。

だから、環境保護関連の法律がいくらあっても、それで環境が守られるわけではないのが中国という国のあり方だ。

このようにして中国の環境汚染は飛躍的に拡大してきた。まさに中国は、生存に不可欠の水まで汚し、すべてを食い尽くすガン細胞そのものなのだ。

中国による海洋汚染の拡大により、人類は新たな地球環境汚染の問題に直面している。中国は自国の大地と河川を死滅へと追いやりつつあるだけでなく、地球をも破滅させようとしている現実を、世界の人々はずっと真剣に考える必要があるだろう。

ガン細胞が造った不吉な塊「三峡ダム」

龍脈を絶つ「巨大な化け物」

一九九三年に着工して二〇〇九年に完成した世界一の巨大ダム「三峡ダム」が早くも不吉な塊かたまりに化けた。

多くの中国人が三峡ダムによって「龍脈」が断られたと信じている。龍とは母なる大河「長江（揚子江）」のことである。

中国人は風水を信じる人が多い。風水によって人に栄光をもたらすこともあれば、不幸に陥ることもあると信じている。風水が破壊されたら子々孫々が不幸になると、中国人のほとんどが考えている。

西の辺境にそびえ立つ山の小さな川から大河となって東の海へ奔流する長江は、民族の命脈であり、風水の龍脈にあたる。しかし、その龍脈がいまや巨大コンクリートの塊によって断たれてしまった。長江はもはや母なる偉大な大河ではなくなり、先に述べたように、悪臭が漂う巨大な「排水溝」に変わってしまったのだ。

なぜ中国はこのような「不吉な化け物」を造ってしまったのか。

三峡といえば、頭に浮かぶイメージとはまず李白の有名な唐詩「早発白帝城」(早に白帝城を発す)だろう。

朝辞白帝彩云间 朝あしたに辞やます白帝彩云の間

千里江陵一日還 千里ちゅうりやういちじつの江陵一日にして還かえる

两岸猿声啼不住 两岸えんぜんせいの猿声啼ないて住やまざるに

轻舟已过万重山 轻舟けいしゅう已に過く万重ばんじゆうの山を

この詩がなぜたくさんの人に愛されているのかといえば、三峡を具象的に描写するのではなく、動的情景で三峡の美しさを間接的に表現しているからであろう。そこに三峡の美が実在しており、多くの人間もそれを知っているから実景を描写する必要もなく、動的表现でその絶景を読者に想像させることができたからだ。

こうした文化遺産を残す三峡が人々を魅了させ、数多くの文学、芸術を生み出す土壌にもなった。しかし、こうした美的意識は中国のガン細胞には無縁なものだ。

欲望と本能で生まれた三峡ダム

三峡にダムを造ろうという発想は極めて中国的である。そこに中国ガン細胞の本能が働いている。その本能とは、金銭欲と功名心だ。李白の詩にある白帝城を水没させ、美しい三峡を破壊し、一四〇万人もの住民を追い出して巨大コンクリートの塊を造る神経は、中国人しか持ち得ない。

中国には「好大喜功」という言葉があり、それは大風呂敷を広げ、功名を追求するという意味である。三峡ダムの建設はまさにこの言葉の通りなのだ。

日本では公共建設の費用は民間のそれより三割も高いという批判をよく耳にするが、手抜き工事はほとんどないと言っている。しかし、中国の公共建設では予算の二割から三割くらいが役人の懐に入るので、公共建設の手抜き工事は常態となっている。

二〇〇八年に起こった四川大地震で倒壊した役所や学校の映像を思い出していたきたい。崩壊した校舎の柱には針金のような鉄筋しか入っていなかった。

中国人の間では公共建設は「豆腐洋工程」(オカラ工事)と呼ばれている。オカラ工事はあらゆる段階でワイロが発生した結果である。一番下っ端の小役人から国の指導者まで、それぞれ二割ぐらいのワイロを要求していくのだから、予算が膨らむ一方、資材を減らさなければとてもワイロに間に合わない。結果としてオカラ工事しかできないのだ。

三峡ダムも例外ではない。その巨大なコンクリートの塊が中国ガンの本能と欲望の象徴となった。

三峡ダムの事業効果について中国の指導者たちはまったく興味がない、と中国の研究者たちも指摘している。中国ガンの目的は事業の効果ではなく、事業を実施することにあるからだ。

環境破壊のシンボル

しかし、指導者たちの欲望を満たすための代価はあまりにも大きい。三峡ダムがあらゆる災難をもたらしているからだ。

ダムが二〇〇九年に完成してから、絶えず発生しているのは、水質汚染と山崩れだ。

水質汚染に関しては、その大きな原因に、先に述べた長江流域における汚水排出量の激増が挙げられる。流域には巨大都市である重慶の三千万人を含め、一億六千万人もが居住しており、その工業・生活排水が長江に流れ込み、三峡ダムは汚染された貯水池になりつつある。

三峡ダムの完成後はダム付近で水流が停止し、自浄機能が失われたため、窒素やリンなどによる汚染が悪化するなど、水質汚染がさらに進んでいる。そのため、長江の支流の水質が悪化して、大量の有害藻類が広範囲に発生し、飲用水の汚染という深刻な問題を引き起こしている。

頻発する山崩れや地滑り

ダムを建設するため、広範囲にわたって森林を破壊したことで地質が弱まり、山崩れを引き起こしている。また、ダムに貯まった水は河岸を浸食して地滑りを引き起こし、住民の生命を脅かしている。すでに地滑りによって壊滅した村すらある。

さらに、ダムの貯水がしばしば地震を誘発するという。三峡ダムの水位が一三五メートルに達した二〇〇三年六月以降、付近では大小千回以上の地震が発生している。このダムが築かれた渓谷は、もともと地質が不安定で、水位が一〇〇メートルを超えると、地震が発生しやすい状況になる。

大規模な地滑りや洪水は、建設当初から頻発しており、環境問題の専門家の間では、三峡ダムの建設は長江の沿岸地域の自然環境を破壊すると早くから予測されていたのだが、当局はそうした指摘や警告を封殺してきた。

ドイツ在住で、ダムの建設企画に参加していた水利専門家の王維洛氏（国土計画学博士）は「当局はこの大型建設プロジェクトを支持する意見しか取り上げなかった」と指摘し、「中国の知識人は、政府の顔色を窺い、自分の見識よりも当局の言いなりになることを最重要視している」「科学者らは中国当局の政治宣伝に同調するだけで、真の客観的な科学論証を示せない」と批判している。

また、米国在住で環境問題に詳しい著名作家の鄭義氏は、ダム建設をめぐる背後に膨大な利益集団が存在し、「権力者と民間業者が結託して自己利益を貪っている状況」だと指摘する。

これぞ中国ガンの本領発揮で、環境問題が無視されるのは当然であろう。経済的効果以上に政治的動機が強い当局の権力者にとっては、巨大ダムを造ることでも得られる「役得」という利益が目当

てなのだ。

「三峡ダムは絶対造ってはならない」と叫んだ黄万里氏

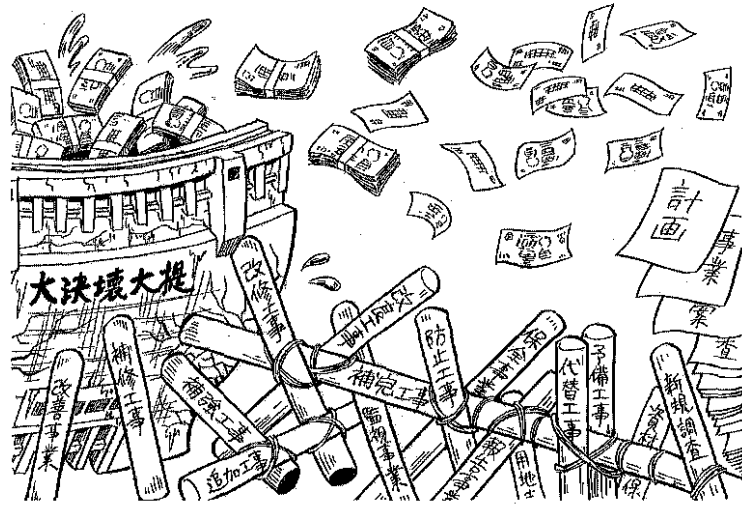
多くの水利専門家は、ダムの決壊もありうる指摘している。その代表的人物は「中国水利界の良心」と称される清華大学水利学部教授だった故黄万里氏だ。彼が亡くなる直前に叫んだ言葉とは「三峡ダムは絶対造ってはならない」だったという。それは、建設に反対する意見書を何度も出したきた黄氏の遺言となったが、三峡ダムは造る途中から決壊を予想できる危険なダムだった。

実際、三峡ダムは二〇〇六年に貯水する段階から早くも亀裂の問題が多発した。中国政府もそれを認め、予算を組んで補修の工事を実施することにした。

三峡ダムが着工するまで、中国政府は反対意見を無視し、反対者を投獄したが、二〇一二年四月、中国国土資源部三峡ダム地区地質災害防止弁公室の劉源主任は、三峡ダムの貯水により災害が増える傾向があり、地滑りや山崩れなどの危険箇所は五三六カ所にもものぼることを明らかにした。

非を絶対認めない中国政府であるのに、なぜ完成してわずか三年後に素直に三峡ダムの問題を認めたのだろうか。世界の中国ウォッチャーの多くは問題が多すぎて隠し切れないから認めるしかないと言っているが、その指摘は正しいものの、主要な理由ではない。

中国問題を考えるときは、人間の思考方式ではなく、ガン細胞の思考方式で考えるべきだ。中国



ガンにとっては、ダムに問題があった方がよいのだ。問題があれば、放置するわけにはいかない。当然、補修が必要になるし、予算も組まなければいけない。そのぶんワイロが入る。着工前は問題のあることを無視して反対者を投獄までしたが、できてしまえば、問題があった方が都合がよいのだ。

治水は「金になる木」

水質汚染の問題にしても、山崩れの問題にしても、ダムそのものと同じように「金になる木」なのだ。問題を処理しなければ、ダムが決壊するかもしれないという下流に住む数億の住民の恐怖感を利用して、金をむしりるのが中国ガンならではの発想なのだ。

ダムの問題はそれだけではない。一四〇万人に

のぼる「三峡移民」もまた新たな「金になる木」となっている。彼らの住居の建設と経済活動に伴う工場の建設もまた新たな「収入源」になるからだ。しかし「三峡移民」の移住先を長江沿岸としたため、山の斜面を崩して開発した。その結果、多量の土砂が三峡ダムに流入し、ダムの決壊を加速させている。

次から次へ発生する問題は、膨大な予算を組む格好の「口実」となっている。問題だらけの三峡ダムは、中国ガンにとっては実は最高の「楽園」なのである。

三峡ダムは決壊する

その三峡ダムは本当に決壊するのかわ？

論より証拠、今まで中国で造られたダムがどうなったか、その実績を見ればよい。中国水源機関の報告によれば、一九五四年から二〇〇三年の間に造られた中国のダムは実に三四八四基も決壊している。平均すれば年間に七一基、五日に一基の割合でダムが決壊する恐ろしい現実なのだ。

新華社通信は中国國務院（内閣に相当）直属の通信社で、政府や中国共産党のいわば代弁メディアだ。その新華社通信がすでに二〇〇七年四月時点で、中国水源機関報告を裏づけるように、矯勇副水利相の「欠陥を抱えたダムは『時限爆弾』のようなものだ。ダム下流地域の住民の生活や資産は深刻な脅威にさらされている」という空恐ろしいコメントとともに、堂々と「中国全土には八万

五〇〇〇基以上のダムがあるが、そのうち三万基（大規模ダム二〇〇基、中規模ダム一六〇〇基を含む）に深刻な構造欠陥があるとみられている」と報じていたのだ。

この新華社通信の記事を受け、AFP通信は中国政府の隠蔽体質を指摘しつつ、三峡ダムの建設現状について、次のように伝えていた。

一九七五年八月に河南省中部を襲った豪雨では、ダム六二基が決壊、破壊されるなどした。

公式統計によると、この災害で、少なくとも二万六千人が死亡、一千万人が深刻な被害を受けたが、この数字は、数年間、隠蔽されたままだった。専門家は、決壊事故のいくつかは技術的な欠陥が原因だとしている。

一方、中国政府が治水対策を目的に、「世界最大の発電プロジェクト」として揚子江中流に建設した三峡ダムでは、ひび割れが見つかり、中国のダム建設技術への懸念が持ち上がっている。しかし、中国政府は懸念を否定。ひび割れに問題はないとし、補修工事を行なっていると説明した。（二〇〇七年四月二〇日付）

建設前から、三峡ダム近辺の地質のもろさからして、ダム建設に適さないという指摘が多くあった。欠陥を抱えた三峡ダムこそまさに「時限爆弾」であり、龍脈を絶つ「不吉な塊」なのだ。三峡

ダムが決壊はないと言い切れる根拠はどこにもない。

それでは、決壊したらどうなるのか？ 数億単位の住民の生命と財産はどうなるのか？ 想像もつかない巨大土石流が工場などをなぎ倒して、天文学的な量の有害物質が海に流れ込んだら、東シナ海は死海と化してしまいうだろう。

だが、中国当局にしてみれば、そんなことは「神のみぞ知る」で、ガン細胞にはどうでもよいのだ。

犯罪は中国ガン細胞の本能

中国独特の「犯罪文化」

世界のどの国でも犯罪はある。しかし、中国は他の国と違って独特の「犯罪文化」を持っている。何度も述べるが、中国人にとって「法」とは、権力者による「搾取の道具」にすぎない。力のない庶民は、法の隙間をぬって生き抜くすべを身につけざるを得ないが、力があれば、法を守る必要もなくなる。

法の前ではみな平等という言葉は中国にもある。しかし、所詮スローガンであって、現実ではないことを中国人なら誰でも知っている。中国では「道徳」という言葉と同様、「法」も実存していないものなのだ。

中国の犯罪の特色は二点に絞られる。一つは、犯罪は全面的かつ普遍的であること。もう一つは、組織的かつ国家的であることだ。

中国ガン細胞には、罪を犯さないという自制は存在しない。犯罪という認識はない。あるのは「できるか」「できないか」だけなのだ。

世界の常識からすれば、社会的地位の高い人間の犯罪とは例外的な事例で、普遍的なこととは考えられない。たとえば、医者には日本ではそれなりの社会的地位があり、先生と呼ばれて尊敬されている。医者は尊敬に値する専門知識と責任感を持ち、命の守護者になっている。当然のことである。

しかし、中国では、社会的地位を利用して私欲を満たすことは普通だから、中国の医者は「白衣の悪魔」と呼ばれている。中国の医者は安い薬を使って高価な薬の金額を患者に請求したり、無茶な検査や治療を行ったりすることが日常的になっている。中国の医者にとって、自分に頼ってくる患者は格好の餌食で「金になる木」なのだ。

風邪で十数万円も請求された日本人ビジネスマン

蘇州にある日本企業の工場責任者である知人が風邪をひいて上海の病院にかかった際、風邪とはまったく関係のない部位のCTや超音波の検査をされ、日本円にして十数万円もの治療費を請求さ

れ、おまけに出された薬を飲んでさらに具合が悪くなった。びっくりした彼は日本に戻って医者に診てもらった。そして、中国の医者が処方したわけのわからない薬をやめたら、元気になった。

それ以来、彼は具合が悪いときは日本に戻って医者にかかることにした。日本なら何をされるかわからない、という心配もなく、飛行機代を入れても、なお安いのだ。

腎臓を医者に盗まれた台湾人ビジネスマン

患者から金をむしり取るだけならまだ可愛い方で、ある台湾人ビジネスマンが中国から帰ってきたとき、どうも体の調子がよくないと病院で検査を受けたら、中国で手術した際に知らないうちに腎臓を一つ盗み取られていたことが発覚した。

中国では患者から臓器を盗む医者は決して例外ではない。臓器売買は「オイシイ商売」だから、臓器を手に入れるチャンスがあれば、逃がさないのが中国の医者なのだ。

その中でも、軍や警察、司法当局と連携できる医者ならもっと恵まれている。彼らは死刑囚からの臓器を手に入れられるばかりでなく、政治犯からも生きたままの「新鮮な臓器」を手に入れることができるからだ。

世界各国の医師が参加する「臓器の強制摘出に反対する医師会」(DAFOH=Doctors Against Forced Organ Harvesting)の二〇一二年の調査発表によると、「過去七年間において、中国では四



万件以上の移植用臓器の提供者が不明だ」という。つまり、年間六千件近くの臓器が闇摘出されていることが判明した。これほどの数は個人では無理で、システム化された組織でなければ到底できないものだ。

コネのある医者が当局と手を結び、こうした利益の大きい犯罪に手を染める。コネのない医者は自分の知恵を働かせて、患者を騙して自分の金銭欲を満たすのだ。

中国の医者にとって彼らの地位はしよせん欲望を満たす手段に過ぎない。医者でさえこのありさまだから、中国では政治や経済をはじめどこでも、「全面的かつ普遍的」に犯罪が行なわれていることは説明を要しない。

薄熙来事件にみるマフィア国家中国の間

中国犯罪のもう一つの特徴である「組織的かつ国家的」ということでは、薄熙来事件が格好の例証だ。

二〇一二年三月十五日、重慶市のトップである重慶市共産党委員会書記の薄熙来が解任され、のちに中国共産党の中央政治局委員および中央委員会委員の役職も剥奪。九月二十八日に党中央規律委員会より党籍を剥奪されて公職も追放された。薄熙来失脚が瞬時に世界のビッグニュースとなった。薄熙来は重慶で「唱紅打黒」（革命歌謡曲を歌え、マフィアを撲滅せよ）キャンペーンで名を馳せ、中央の次世代指導者の一人とみられ、中国権力の核心である中央政治局常務委員会入りもささやかれるほどだった。

薄熙来がいったん失脚すると、犯罪事実が次から次へと当局によってリークされ、マフィア撲滅の英雄から巨悪の犯罪者として中国のマスコミに袋叩きにされた。これもまた「打落水狗」（水に落ちた犬は叩け）という中国独特の文化なのだ。

リークされた情報によると、彼は警察と司法を利用してのマフィア撲滅運動によって没収した一兆三〇〇億円の財産のうち、四八〇〇億円の大金を自分の懐に入れたという。重慶市の警察も司法も、薄熙来がつとめていた共産党委員会書記の管轄下であるから、彼はマフィアであろうと誰であろうと、合法的に死刑にしてその財産を奪いとることができたのだ。

仲間であつても用済みなら消す

中国の法は権力者のための道具であることを、薄熙来事件からもうかがえる。そして彼は、法の手続きを経ない殺人にも関与していた。

皮肉なことに、この私的殺人を暴露したのが彼の側近だった王立軍だ。重慶市の公安局長をつとめる警察のトップとして薄熙来と手を組んできた王は、自分も薄熙来に殺されるのではないかと危険を感じ、二〇一二年二月六日、成都にあるアメリカ総領事館に政治亡命を求めて逃げ込んだ。しかし、亡命が受け入れられなかった王はその翌日、国家安全部により「休暇式治療」を受けるということで北京に連れて行かれ、九月二四日に四川省成都市中级人民法院で取賄と職権乱用の罪で五年の実刑判決を言い渡された。

側近の間でも用済みとなつたら消すのがガン細胞の思考である。

しかし、薄熙来は不法蓄財や殺人などの「犯罪」によって失脚したわけではない。太子党の一員である彼は、同じ太子党の習近平に取って代わろうとするむき出しの野心を警戒され、ついにもう一つのガン細胞で、習近平とは近い関係の胡錦濤をトップとする中国共産主義青年団出身者の派閥「団派」との権力闘争に負けたただけなのだ。薄熙来と王立軍の関係が、胡錦濤・習近平と薄熙来の関係に移つたに過ぎない。

次から次に出てくるスキヤンダルの暴露は一種の見せしめであり、薄熙来の残党に対する警告な

のだ。

薄熙来ぐらいの蓄財や犯罪なら、中国の直轄市や省の書記レベルの高官はみなやっていることだ。中国国家主席の胡錦濤はチベット書記の時代、一〇万人以上のチベット人を殺したといわれる。

中国の権力者にとって、蓄財や殺人は罪ではなく、地位が安定しているなら評価すべき能力なのだ。そのスケールが大きければ大きいほど、国家の指導者にふさわしいとみなされる。ちなみに、毛沢東は自国民を数千万人も殺した。それゆえ、今でも中国では絶大の人気を誇っている。

日常化・制度化した中国の組織的犯罪

著書『中国現代化の落とし穴』が発禁処分を受け、当局に狙われたため、アメリカに亡命した中国人経済学者の何清漣は、この本で中国社会の構造的病弊と腐敗の根源を衝いた。その後の「中国の闇―マフィア化する政治」では中国の権力者とマフィアとの結託による犯罪図式を克明に分析している。

何清漣氏の緻密な調査により「黒社会が権力者に近づきワイロを贈り、権力の後ろ盾を求める」「権力者も黒社会を利用し相互に利用しあい」「最後は黒社会のボスが権力そのものに入っていく」「そして国家そのものが腐敗していく」過程を、実例をあげながら詳しく描写している。

彼女は、こうした中国の犯罪は歴史的背景や社会構造によるものだと分析し、組織的犯罪そのもの

のが中国社会の中で日常化し制度化していると強調している。

中国経済のガン細胞体質

助け合って生きていく正常な細胞

経済とは一種の交換行為であり、提供できるものを出し合って互いに自他の不足の部分を補っていくものである。こうした活動は共存共栄の土台に立っているからこそ、社会が永続できるのだ。

正常な社会における正常な経済活動では、利益の独占は許されない。なぜなら、利益の独占や富の一極集中はやがて社会全体を崩壊させてしまうからだ。社会全体が崩壊してしまえば、当然、利益の独占者も生き残ることができない。単純明快な理屈だ。

人間社会と同じような経済活動を営む正常な細胞は、そのことを知っている。だから、他の細胞と助け合って生きていく。

胃の細胞が食物を細かく分解して吸収しやすくし、分解された栄養分を小腸が吸収し、静脈が各臓器に送る。肺なら、酸素を吸入して血液に運ばせて心臓に送り、心臓がその血液を体の隅々の細胞に運んでくれる。こうして役割を分担しながら共存していくのだ。そこに強者も弱者もない。

もし、肺が自分で苦勞して手に入れた酸素なんだから、別の臓器にあげたくないと言い出したら、

人間はたちまち死んでしまう。もちろん肺も死ぬ。

そんな無茶なことを肺はしなと思われるかもしれないが、肺のガン細胞ならそういう無茶なことを平気でやる。だから人間は肺ガンで死ぬ。そんな無茶なことをすれば、いざれ自分も破滅すると頭ではわかっている、ガン細胞は利益を独占しようとする欲望と自己中心的な本能には勝てないのだ。

「劫貧濟富」というガン細胞体質の経済

中国のいわゆる社会主義市場経済とはなにかと言えば、公権力による富の略奪と独占の経済であり、富者が貧者から財産を奪い取るというものだ。すなわち「劫貧濟富」（貧しい者から略奪して富める者を救済する）である。これはガン細胞体質の経済と言えよう。

中国の経済は、富める者はますます富み、貧しい者はますます貧しくなるというシステムを持っている。これは鄧小平による「富める者からまず富め」という掛け声によってもたらされと思われているが、そもそもこれが中国の伝統的な経済構造なのだ。鄧小平によって中国はこの経済文化の原点に立ち返ったのであり、そしてその文化が開花したと言っべきだろう。

このことから、中国がもつとも共産主義にふさわしくない国であることがわかるだろう。共産主義に一番ふさわしい国といえば、むしろ日本の方である。日本には和の精神、つまり、みなで均質に分ち合うという精神がある。

一人の有能で有力な人間が富を創出し、それを他の者と分け合わなければ共産主義という社会は成り立たない。つまり、強い自己犠牲の精神がなければ成り立たないのである。

しかし、中国にそれはありえない話だ。この国は力がある人間だけが富を蓄えていくのだから、実態は極端な資本主義社会と表現する経済学者もいるが、中国経済はそれよりもひどく、ガン細胞の体質そのものだ。

死んでなお財産にしがみつくと中国人

西側の社会は資本主義だが、一方で富の再分配の法則が確立している。ボランティア精神、弱者救済の精神、慈善事業の精神、博愛の精神がしっかりと根づいている。

これはキリスト教文明と関係があるだろう。キリスト教社会では、現世よりも来世、永遠の生命を追求し、現世にあるものはいざれ消え去ると考えられているから、このような精神が共有されている。

しかし中国人の場合は、いかにして永遠に死なないようにするかという、現世の生に執着する。そのため、死んでも自分の財産を墓場まで持っていこうとする。

たとえば、世界にあまり類を見ない陪葬ばいざうの習慣がそれだ。権力者は財産はもとより、側室や家来

といった近臣まで道連れにして己の墳墓の近くに埋葬した。秦の兵馬備はその象徴だ。始皇帝という大権力者は、何万もの軍隊まで墓場に持つていこうとしたが、それは不可能なので、代わりにあのような人形を作って陪葬したのだ。

権力も利益も名誉もすべて欲しがる中国人

日本では、社会的地位の高い者は、経済的利益をさほど重視しない。それよりも、人に尊敬されることで満足する傾向がある。名誉と利益の両方を欲しいという欲張りは比較的少ない。名誉を獲得するには利益を放棄しなければならず、利益を求めるには名誉を犠牲にするところが日本の社会にはある。

しかし中国人の場合は、権力、利益、名誉をすべて手に入れようとし、あらゆるものを自分のものになりたいと考える。

それが伝統的な中国思想だから、強者が弱者からすべてを奪い取る略奪経済が生まれたのだ。このように中国の経済的ガン細胞現象とは、中国文化の中に内包されているのである。

農地強制徴用はガン細胞体質の象徴

中国の「劫貧済富」の象徴と言えるのは、地方政府が農民から土地を奪い取る「農地強制徴用」

問題だ。

中国は都市人口が増え、農村人口は減る傾向にあるが、それでも農村の人口は六割を占め、その数約八億と言われる。農村住民の実際収入は都市住民の約六分の一と邱曉華・元国家统计局局長が指摘しているように、今やその格差は九〇年代と比べ三倍にも広がっている。

その貧しい農民から唯一の生産手段である土地を奪い取るのはなぜなのか？

中国の現行土地所有制度は、都市の土地はすべて国家所有、農村の土地はすべて農民集団所有という都市農村二重制度になっている。

農地は農民の個人所有ではないので、地方政府は「公益」のために強制徴用できる。安い補償金で徴用した土地を不動産デベロッパに売れば、数十倍の利益が地方役人たちの懐に入る。

九〇年代の開発ブームに乗って、地方役人が農地徴用によって得た収入は税金に匹敵するほどだと言われている。ある研究者の試算によれば、一九八〇年以降の二五年間、農民が土地の徴用によりこうむった損失は約三〇兆円にものぼるといふ。

もちろん、農地徴用によって中国の耕地面積も急速に減っていく。そのスピードは平均年間六〇万ヘクタールに及び、日本全国の耕地面積の一五%にも匹敵する。

このようにして安い補償金で土地を追い出された若い農民は都市に流入して産業労働者になるが、都市戸籍を持たない彼らは制度的に差別されていて、厳しい労働条件を強いられている。

しかし、中高年の農民は行き場がなくなり、わずかな補償金が底をついたら文字通り無一文になる。

役人が土地を徴用し、それを売るといふ、法を利用したシステムの略奪現象こそ、強い者は増殖し、弱い者は死滅していくというガン細胞現象なのだ。

「汕尾事件」でわかった中国当局の残忍さ

こうした中国経済ガン細胞の強制土地徴用の実態が世界に注目されたきっかけは、二〇〇五年末に起こった「汕尾事件」である。

汕尾事件とは、発電所を建設するための土地強制徴用に対し、抗議する広東省汕尾市東洲村の村民を中国当局が射殺した虐殺事件である。

現場に潜入した外国の新聞記者が事件を詳しく報道したことで、世界を震撼させた。村民の死者数について、AFP通信は約三〇人が武装警察に殺されたと公表したが、香港のメディアは村民の話を用いし、七〇人以上が死亡し、五〇人ほどが行方不明と報道した。

当局は事件の発生から四日後、初めて沈黙を破って虐殺事件を認めたが、事件は「少数の首謀者が引き起こした重大な違法事件」とし、一四〇人の村民を指名手配した。そのうちの三名の村民は、事件とまったく関係のない麻薬犯罪の罪を着せて逮捕された。

土地を奪われた農民が抗議するだけで犯罪者にされるのが中国だ。これが血も涙もないガン細胞のやることだ。

一億四三〇〇万円の車を取り回す村の幹部

生きる術をなくした農民がたくさんいる一方、地方役人の贅沢ぶりは想像を絶するものがある。それを象徴する事例が二〇一一年一〇月二日に山東省臨沂市潘泉庄村で開かれた「第一回中国の村長フォーラム」での出来事である。

「大紀元報」が伝えるところによれば、地方の役人たちの多くは高級外車で大会に乗りつけ、会場駐車場にはベンツやBMW、ロールスロイスなどの高級外車ばかりがズラリと並ぶ。モーターショーさながらの光景となり、大会を取材した記者に「数百万円(数千万円)の車で来たら、面目丸つぶれになるのだ」と語ったある村の主任は、一億四三〇〇万円相当の超豪華なキャンピングカーで会議に来ていたという。

中国社会科学学院の『農村経済緑書』(二〇一一年度)によると、二〇一〇年の中国の農村一人あたりの年間純収入は六一二六元(約七万三〇〇〇円相当)だった。もしこの年収で一億四三〇〇万円の車を買おうとしたら、飲まず食わずで一九一八年もかかる。開いた口がふさがらないとはこのことだ。

この事例から、中国の「国富官富民貧」という格差社会の実態と、その裏にある汚職の蔓延がいかにひどいかがわかるというものだ。

実は「第一一回中国の村長フォーラム」の高級外車に乗っている村の役人たちがつけているナンバープレートは「888」や「666」など、中国では縁起が良いとされる番号ばかりだったという。「888」とは「発発発」で金儲けの意味で、「666」とは「碌碌碌」で「金金金」の意味なのだ。

高級外車といい、それに付けたナンバープレートといい、中国ガンの底なしの欲望を如実に現している。すでに中国国内では、経済的なガン細胞現象は頂点に達している。

では、世界の経済に対してはどのような影響を及ぼしているのだろうか？ 実はこのガン細胞はすでに世界の隅々まで転移していて、地球そのものを蝕み始めているのだ。

2 世界に転移する中国ガン

中国毒を世界中にまき散らすガン細胞

悪性中国ガンは遠隔転移して自他を破壊する

正常な細胞は決まった場所で自分の役割を果たしている。胃の細胞なら、胃袋で消化機能の一端を担っている。しかし、ガン細胞はおとなく自分の居場所にとどまっていられぬ。胃ガンになったら、胃ガン細胞は肝臓に入ったり肺に入ったりする。それがガン細胞の遠隔転移というものだ。

胃ガンが肝臓に入ったら、肝臓の正常な機能を邪魔するだけでなく、肝細胞の栄養分を奪い取り、